琉球新報　2000年（平成12年）5月15日　月曜日

身近なところから行動を

小中学生サミット

沖縄サミット KYUSHU-OKINAWA SUMMIT 2000

2000人参加、宣言採択

地球環境など論議

地球環境の保護に向け、宣言を採択した「小中学生サミット　in OKINAWA」＝那覇市奥武山・県立武道館

「二十一世紀の地球環境を考える」をテーマにした「小中学生サミット　in　OKINAWA」（サミット推進県民会議主催、文部省共催）二日目は十四日、那覇市奥武山の県立武道館で県内外から二千人以上が参加して討論会が開かれた。

討論後、自然を守るために、一人ひとりが身近なところから行動を起こすことの重要性が強調され「資源の再利用や、身近な環境の美化に努める」といった目標などが盛り込まれたサミット宣言を採択した。宣言文は会場を訪れた森喜朗首相に手渡され、七月の沖縄サミットで各国首脳にも伝えられる。

（9面に特集）

討論会は全国九ブロックの代表が環境保護への取り組みを発表。それを基にフロアも交えて意見を交わした。

討論では宮崎県都城市立五十市中学校の小島千秋さん（三年）が「環境保護を進める時は『古里の自然を守るんだ』という目標を持つべきだ。そのために古里の自然を積極的に学ぼう」と、地域から行動を起こすよう呼び掛けた。

宮城県登米町立登米中学校の跡部ふみさん（三年）は「大人に責任を押し付けないで、一人ひとりが少しずつ努力しよう」と、二十一世紀を担う自分たちの責任について決意を述べた。

宣言は、参加者を代表して沖縄市立美東小の稲嶺盛吾君（六年）と糸満市立兼城中の玉城温子さん（三年）が読み上げ「私たちができること」として、資源の再利用などを誓った。

また「大人に伝えたいこと」として、たばこの投げ捨てをしないことや、争い事をなくし、人と自然に優しい平和な国づくりなどを求めた。

小中学生サミット最終日の十五日は、本土からの参加者が首里城の見学などを行って閉幕する。

沖縄タイムス　2000年（平成12年）5月15日　月曜日

小中学生サミット

環境問題熱つぽく

県内外の代表論議　宣言文を森首相に

「小中学生サミット in OKINAWA」（主催・県サミット推進県民会議）の討論会が十四日、那覇市の県立武道館で開かれた。県内外の小、中学生八十四人のパネリストと県代表三百人のフロア参加者が「地球環境」をテーマに熱い論議を交わした。「私たちにできること、大人に伝えたいこと」と題し「自然の大切さを学び、自然を守るために努力します」などの宣言文をまとめアピールした。

会場には延べ二千五百人の観客が詰め掛け、代表者の討論を見守った。

基調提案で平良市鏡原中学校の下里佳苗さん（三年）は沖縄の自然を紹介し、さんご礁の白化現象やごみ捨て場のようになった海岸などの問題を指摘。「環境問題は生活と密接な関係がある。私たち自身が行動を起こすべきだ」と呼び掛けた。

全国八ブロックの代表も地域や学校の取り組みを報告した。北海道東中の沢田大輔さん（三年）は、日本一汚れた湖といわれた春採湖が地域の活動でよみがえる様子をリポート。広島県大柿中の瀧口雅子さん（三年）は「町のボランティア団体活動で知った瀬戸内海の自然の素晴らしさを多くの人に伝え、その自然を壊すことの重大さを知ってほしい」と発表した。

フロアから三重県藤原中の種村光訓さん（三年）は「大人の行動を待つのではなく、日ごろ環境について勉強している子供がリードしていかないといけない」と発言、会場からの拍手を呼んだ。竹富中の上間ほのかさん（三年）は「生活の便利さと環境保全の両立は難しいが、私たちが便利さを少し我慢すれば生き物の絶滅は招かないと思う」と提案した。

こうした意見は宣言文に盛り込まれ、会場を訪れた森喜朗首相に手渡された。

ゲスト出演した数学博士のピーター・フランクルさん（四七）は「高水準の発表に驚いた。環境問題は実現可能な政策を選択し、感情的にならないことが大切。そのために多様な価値観を認めることができる本当の国際人になってほしい」と応援した。

全国各地の現状を報告、活発な意見を発表する代表ら
＝那覇市・県立武道館

小中学生サミット in OKINAWA開催中

五月十三日（土）～十五日（月）

沖縄県立武道館　他

全国の小中学生と県内の小中学生が、「二十一世紀の地球環境を考える」をテーマに討論を行い、環境問題に対する意識を高めるとともに交流を図り、サミットについての理解を深めることを目的に開催。

初日は参加者の交流やレセプション、二日目にサミットを開催し、基調提案や各地の報告、意見交換などを行い、まとめた意見をサミット宣言として発表します。最終日には沖縄の自然や歴史、文化施設などを見学する予定です。